

富山県

新湊市埋蔵文化財分布調査報告IV

2000年度

2001年3月

新湊市教育委員会

富山県

新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ

2000年度

2001年3月

新湊市教育委員会

序

新潟市は天然の良港である放生津瀬を擁し、縦横に走る河川によって周辺の地域と結ばれ、その水の利を活かし、古くから日本海側の海運と漁業の拠点として発展してきました。

鎌倉時代には越中守護所がおかれ、また室町將軍足利義材が滞在するなど、越中の政治・経済・文化の中心として栄えました。往時の活発な人々の交流、物資の運搬などそのにぎわいが偲ばれます。

先人が残した歴史・文化・風土は、現代に生きる私たちが未来に引き継ぐ貴重な財産です。市内に残る遺跡も、地域に根ざした歴史を語る財産であり、郷土資料の一つと言えるでしょう。

新潟市では平成9年度から、遺跡地図を整備し、その周知と保護を図り、また開発行為との事前調整に役立てるため、市内遺跡の分布調査を行っております。今年度はその4年目にあたります。

この報告書には不備な点も多々あると思われますが、より多くの人に活用され、文化財保護の一助になりましたら幸いです。

終わりになりましたが、地元の方々をはじめ多大なご協力とご支援をいただきました関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成13年3月

新潟市教育委員会

教育長 竹内伸一

例　　言

- 1 本書は、新潟市教育委員会が国庫補助をうけて5か年計画で実施している、遺跡詳細分布調査の4年目（2000年度）の調査報告書である。
- 2 調査は富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室の指導及び協力を得て、新潟市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 今年度の調査は、新潟市堀岡・海老江・本江地区を対象とした。
- 4 現地調査参加者は下記のとおりである。（敬称略　五十音順）

阿部　来　猪狩俊哉　岡田　幸　小栗由希代　折田晃子　北川康介　榎井絵里奈
澤野慶子　新宅由紀　砂田普司　田中俊輔　田中洋一　葛川貴祥　床平慎介　丹羽直美
福沢佳典　松澤那々子　向嶋　裕　安瀬佳織　山下　研　山本敦幸　道佐真一郎　吉村　晶

（以上富山大学人文学部考古学研究室）

- 5 本書の作成は下記の協力をうけて新潟市教育委員会文化財保護主事　金三津英則が行った。

（敬称略　五十音順）
麻生和美　浦山みこと　楠井悦子　立野浩美　塙田高史　前田三津子
- 6 現地調査にあたっては、本江公民館をはじめ地元の方よりご協力、ご理解をいただいた。また本書の作成にあたっては、下記の方々から貴重なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。

（敬称略　五十音順）
上田尚美　岡本淳一郎　久々忠義　境　洋子　戸谷邦隆　町田賢一　三島道子　森　隆
- 7 採集遺物、記録図面等は新潟市教育委員会が一括して保存・公開している。

- 8 本書の図版の表示は下記のとおりである。
 - (1) 第4図の凡例は次のとおりである。

 埋蔵文化財包蔵地	 繩文時代遺物	 弥生・古墳時代遺物
 古代遺物	 中世遺物	
 近世以降遺物		
 - (2) 遺物実測図中のスクリーントーンの貼り込みは次のとおり表現した。

 須恵器	 赤彩
 珠洲焼	

目 次

序 文

例 言

目 次

I はじめに

1 新湊市の地勢と環境	1
2 調査の目的と方法	1
3 2000年度調査地区概要	2

II 調査の概要

1 遺跡と採集遺物	7
(1) 堀切関所跡 (周知)	7
(2) 利波遺跡 (周知・範囲変更)	7
(3) 本江遺跡 (周知・範囲変更)	8
(4) 本江東遺跡 (周知・範囲変更)	8
(5) 本江中遺跡 (新規)	8
(6) 本江西遺跡 (新規)	9
(7) 本江針山遺跡 (新規)	9
(8) 本江針山西遺跡 (新規)	9
(9) 遺跡範囲外採集の遺物	10
2 遺物の散布状況	10
(1) 縄文時代の遺物散布状況	10
(2) 弥生・古墳時代の遺物散布状況	10
(3) 古代の遺物散布状況	11
(4) 中世の遺物散布状況	11
(5) 近世以降の遺物散布状況	12
3 小 結	12

図面目次

第1図 新湊市位置図
第2図 調査地区割図 (1/7万5千)
第3図 D地区概要図 (1/5万)
第4図 D地区遺跡地図および遺物採集地点 (1/1万5千)
第5図 採集遺物実測図 (1/3)
第6図 縄文時代の遺物散布状況
第7図 弥生・古墳時代の遺物散布状況
第8図 古代の遺物散布状況
第9図 中世の遺物散布状況
第10図 近世以降の遺物散布状況

写真図版

図版1 航空写真
図版2 調査風景
図版3 調査風景
図版4 遺跡現況 (堀切関所跡・利波遺跡・本江遺跡)
図版5 遺跡現況 (本江東遺跡・本江中遺跡・本江西遺跡)
図版6 遺跡現況・石造物 (本江針山遺跡・本江針山西遺跡)
図版7 石造物
図版8 石造物
図版9 採集遺物

I はじめに

1 新湊市の地勢と環境

新湊市は、富山平野を東西に分ける呉羽山丘陵の西側に位置する。

富山湾へ注ぐ庄川の、最下流東岸に広がる低湿地を中心にその市域を形成している。東西11.25km、南北6.74kmと東西に長い市である。人口は約3万8千人で、現在の主な産業にはアルミ加工をはじめとし、地場産業である製材業及び漁業などがある。

射水平野と呼ばれるこの低湿地の中央には、かつて、海退や土砂の堆積によってつくられた放生津潟があり、現在は富山新港として利用されている。

放生津潟は、繩文時代前期の縄文海進のころは、現在の射水丘陵のあたりまで広がっていたとみられる。その後、気候の寒冷化に伴い次第に陸地化し、庄川・和田川・下条川・鍛冶川・神楽川などの諸河川によって運ばれた砂や粘土は、所々に微高地を形成していった。このような氾濫流路につくられた自然堤防などを中心に、この土地での人々の生活が始まったと考えられている。

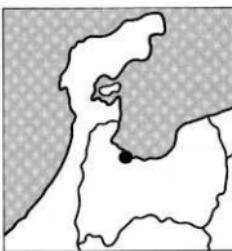
古代には高岡市伏木に国衙が置かれ、近くには亘理湊が設けられた。しかし気候の寒冷化に伴う海面の低下によりその機能が低下したため、現在の新湊市街地である放生津にその機能が移されたと考えられている。鎌倉時代中頃には、放生津の地名が現れるようになる。中世の放生津は、越中の守護所が置かれるなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

往時は三角洲の末端のように低湿で、特に潟の周辺は水郷の低湿地であったという。低湿地の多くが水田に利用され、縱横に水路が走り、タズルやイクリと呼ばれる船の交通路ともなっていた。稲架用と水路の岸崩れ防止に植えられたトネリコ並木が、水郷地帯ならではの独特的景観をかもし出していたが、昭和30年代から40年代にかけてすすめられた富山新港設置や場整備などにより、溝田解消の努力が重ねられ、周辺の景観は一変した。

2 調査の目的と方法

新湊市では昭和30年代から40年代にかけて富山新港設置や場整備などの大型の事業が進められた。これまで工事中に土器などの遺物が見つかっても注意が払われることは少なく、あるいは工事の妨げになるものとして除外されることもあった。かつては海であり、新湊市のような低湿な土地には人々は生活していないかったと考えられがちだったのだろう。

富山県が昭和47年（1972）に発行した『富山県遺跡地図』には、新湊市の遺跡は34か所記載されている。また平成5年（1993）発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地図』には、39か所の遺跡が記載されている。これ



第1図 新湊市位置図

は昭和40年代の調査が基本となっており、伝聞・推定によるものや、開発行為に先立つ調査によって明らかになったものが多く、未調査地域も残されているものと思われる。

ここ数年、開発行為に先立ち散在的に行う分布調査や発掘調査によって、新たに発見される遺跡や、範囲の修正が必要と思われる遺跡、中には人知れず葬られていった遺跡も少なからず存在することがわかつてき。そこで、埋蔵文化財の保護と活用、開発行為との調整のため、市域全体を対象とする系統だった分布調査を実施し、遺跡地図及び台帳を充実させることとした。

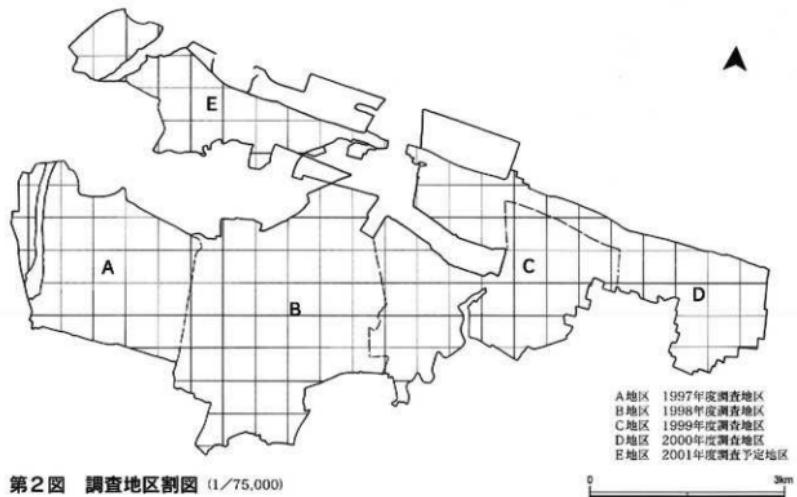
調査は、新潟市が国庫補助をうけ、富山大学人文学部考古学研究室の指導と協力を得て進めることとなった。市域を5つの地区に区分し、平成9年度から13年度まで5か年の予定で行うこととした（第2図）。順次現地踏査を実施し、その成果は年度ごとにまとめるものとする。また最終年度には、小字名などを調査するとともに市内全体をまとめた遺跡地図を発刊する予定である。

3 2000年度調査地区概要

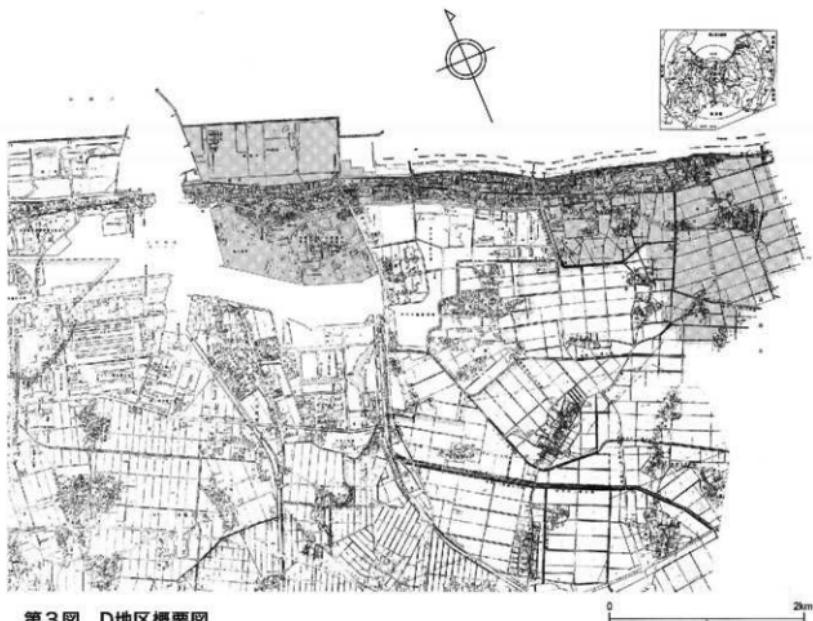
今年度の調査対象地区であるD地区は、新潟市海岸部のはば中央から東半部に位置する堀岡・海老江・本江地区である。当地区は富山湾に面した東西約6km・南北約0.4~2kmの東西に長い区域で、東の富山市との境界から富山新港の東岸部に至る。南側では東部より富山市の利波集落、下村、新潟市片口・七美地区のそれぞれに接している。なお、昨年度の分布調査終了後の平成12年4月に、東部二ヶ所排水路を挟んだ南側に隣接する下村山腹地内で新たな遺跡が発見され、新潟市側での遺跡の広がりを確認する必要が生じたため、昨年度調査区の一部を補足として調査範囲に含めた。

当地区は市内の他地区と同様、地形的には射水平野北端部に位置する複合扇状地性の三角州沖積平野である。海岸部では神通川によって運搬された砂泥が富山湾を流れる沿岸流の作用によって西へ運ばれるため、古くから砂丘が形成され放生津潟の北岸を形成していた。

この海岸沿いの砂丘地帯や旧放生津潟東岸部の本江付近では、古くから人々が生活していたと考えられる。県内では古代の官道である北陸道の駅として、坂本・川入・亘理・白城・磐瀬・水橋・布施・佐味の8駅の存在が知られている。このうち亘理～磐瀬駅間の経路については、亘理駅（推定所在地：新潟市六渡寺・高岡市矢田等）から放生津潟付近の低湿地を迂回して白城駅（推定所在地：下村大山石・小杉町小山石・富山市花ノ木等）を通り、磐瀬（推定所在地高岡市岩瀬）へ至る経路が想定されているが、蝦夷征伐のための軍道としての利便性や、磐瀬駅へ至る最短経路であり、川合駅～亘理駅・磐瀬駅～水橋駅～布施駅～佐味駅など、他の駅間との直線距離がほぼ等しいなどの点から、7世紀後半頃には海岸の砂丘地帯を通っていたとする意見もある（柳元1998）。中世には放生津と県東部とを海岸沿いに結ぶ交通の要所となり、「越國雜記」文明18年（1486）には「ねりあいの里」（新潟市海老江練合）の名がみえ、延徳3年（1491）には冷泉為広が放生津普照寺から海老江・練合・足洗を通過し、越後へ赴いている。永禄年間（1592~1595）には庄川河口までに閑所が何か所も設けられており、富山市の極性寺所蔵の墨書きから小渡・六渡寺・殊數く里・中橋などの閑所の存在が確認できる。このうち、殊數く里の閑所が堀岡地内に比定されている。また堀岡地区では、堀岡古明神地内で昭和34年の護岸工事の際に、海面下約1mの地点より土師器・須恵器が出土したと伝えられているほか、「延



第2図 調査地区割図 (1/75,000)



第3図 D地区概要図

喜式』に記載されている式内社、草岡神社の所在地がこの地に比定されている。

本江地区には周知の埋蔵文化財包蔵地である利波遺跡、本江遺跡、本江東遺跡が所在し、地区の南部に位置する現在の下村加茂東部（新村）付近には、古代の西大寺領桿山荘が存在していたとされている。桿山荘は神護景雲3年（769）に大和西大寺の田籍に組み入れられた初期庄園で、奈良・平安時代を通じて存在し、中世の倉垣庄へと引き継がれているようである。建久2年（1191）には406町もの面積を有していることが田籍関係文書に見られる。本江東遺跡では平成11年度の調査で古代の集落跡が確認されており、この桿山荘との関係が想定されている。また『射水郡誌』によると、同地区足洗は平安時代に後冷泉天皇～崇徳天皇までの6代の天皇に仕え、『潮野群載』、『拾遺往生伝』等の多くの著書を残した算学博士、三善為康の出身地とされている。

海岸沿いの砂丘後背地は、かつての放生津潟が市の東端部の本江付近にまで広がっていたため、縄文時代前期の海進以米中世に至るまで長らく人の住めない土地であったと考えられている。これらの地域では江戸時代に入ってから新山開発が活発化し、堀岡新、明神新、本江中新、利波新、本江針山新などの多くの村立てが行われた。昭和43年に放生津潟は富山新港の開港に伴い日本海と結ばれた。現在では堀岡～海老江にかけての地区は宅地の造成が進み、海岸部では約90ヘクタールにもおよぶ埋め立工事により新しく海老町が誕生し、海老スポーツランド、新湊マリーナ等の多くの施設の建設されるなど環日本海時代の港湾都市として様相を新たにしている。現在ではただ足洗のみがかつての放生津潟の面影をとどめている。



第4図 D地区遺跡地図および遺物採集地点

II 調査の概要

1 調査結果概要

調査対象地区では昭和47年（1972）発行『富山県遺跡地図』・平成5年（1993）発行『富山県埋蔵文化財包蔵地図』とともに1箇所の遺跡の存在が記載されている。その後の調査の進展により今年度の調査時点では、堀切閣所跡（203034：県遺跡番号、以下同）、利波遺跡（203039）、本江遺跡（203053）、本江東遺跡（203054）の4遺跡が周知されていた。

以下、今回の分布調査結果を各遺跡ごとに記す。遺跡の範囲および遺物採集地点は第4図に、岡化した遺物は第5図及び写真図版9にそれぞれ掲載した。

（1）堀切閣所跡（周知：第4図-1）

堀岡明神新に所在する遺跡で、標高は約1.3m、範囲は東西約110m、南北約120mを測る。遺跡の存在は早くから知られており、昭和40年（1965）文化財保護委員会発行の「全国遺跡地図一富山県」には既に閣所跡としての記載があり、昭和47年（1972）富山県教育委員会発行の「富山県遺跡地図」では室町時代の閣所跡との記載がある。しかし過去の調査実績がなく、当初より遺跡所在地の周辺が宅地化していたため、その内容は不眞のままである。文献から遺跡の内容を推定すると、16世紀末の永禄年間に当地に所在していたとされる「殊數く甲」の閣所跡に比定できそうであるが、「新湊市史」では現在の射北中学校横の字野寺にその所在地が想定されており、当遺跡とは距離的に開きがある。

今回の調査では、遺跡範囲内に所在する猿山彦神社の境内地を中心に遺物の採集を試みたが、近世陶器が1片採集されたのみで当該期の遺物の散布は見られなかった。

（2）利波遺跡（周知・範囲変更：第4図-2、遺物：第5図-1～8）

富山市と下村との境界付近に位置する、本江道番集落の東方に広がる繩文時代後・晩期、弥生時代、古墳時代を中心とする散布地である。遺跡の大部分は富山市側に広がっており、新湊市側の遺跡範囲は東西約700m、南北約600mにわたって広がる。標高は約1.2～2.0mである。昭和39年には富山市の利波集落南方で発掘調査が行われ、弥生時代後期後半～古墳時代前期頃の遺跡の広がりが確認されている（岡崎1966）。新湊市では平成9年度に一度試掘調査が行われたのみであり、その際には造構・遺物は確認されていない。

今回の調査では弥生・古墳時代～近世にかけての各時代の遺物が採集できたが、中でも弥生・古墳時代と中世の遺物がやや多く採集されている。採集した遺物には弥生・古墳時代の土器、古代の土師器、須恵器、中世土師器皿、珠洲、青磁、伊万里、唐津、越中瀬戸がある。

1～3は弥生・古墳時代の土器で、1は壺の底部、3は壺の口縁部付近と考えられる。4は中世土師器皿、5～7は珠洲である。8は青磁の碗で、底部に鍋蓮弁文を施す。

調査の結果、従来の遺跡範囲の北及び北東側にも遺物の散布が確認できたため、遺跡範囲を拡大した。

(3) 本江遺跡（周知・範囲変更：第4図-3、遺物：第5図-9～15）

平成10年度に開発事業に先立つ分布調査によって発見された遺跡で、弥生時代、古墳時代、古代の遺物が採集されている。遺跡は本江集落と本江中新集落の間に広がり、標高は約1.8m～2.3m、遺跡範囲は東西約450m、南北約500mで南東～北西方向に伸びる。平成11年度に遺跡範囲の東端付近で試掘調査が行われているが、遺構、遺物は確認されていない。

今回の調査では、弥生・古墳時代の土器、古代の土師器・須恵器、珠洲、青磁、伊万里、唐津、越中瀬戸が採集できた。

9～11は弥生・古墳時代の土器で、9・10は甕か壺の口縁部と頸部、11は外側ミガキ、内面にはハケメが見られる。12は古代の土師器で内面に放射状タタキ痕がある。13・14は須恵器の蓋と底部、15は珠洲である。

過去の分布調査の成果と同じく、遺跡範囲の南西部に弥生・古墳時代の遺物が、東部に古代の遺物が多く分布する傾向が見られ、過去の遺物の散布状況と今回調査時の散布状況から遺跡範囲を若干変更した。

(4) 本江東遺跡（周知・範囲変更：第4図-4、遺物：第5図-16～29）

本江遺跡と同じく平成10年度の分布調査時に発見された遺跡で、過去の分布調査では弥生時代～近世の各時代の遺物が採集されている。遺跡は富山市との境界地点に位置し、遺跡範囲は国道415号線～本江集落の北端部までの南北約530m、東西約580mにわたって広がっている、標高は約0.9～2.7mである。

平成11年度には遺跡の北端部で土地区画整理事業に先立つ試掘調査が約46,000m²を対象に実施され、調査対象地のほぼ全域で古墳時代初期～中世にかけての遺跡の広がりが確認されている。同年、道路造成部分を対象に行った本調査では古代のカマド跡と推定される遺構が確認されており、遺跡の立地や土鍊の出土がめだつ点などから漁村集落的な性格をもつと推定されている。

今回の調査では弥生・古墳時代の土器、古代の須恵器、土師器、中世土師器皿、珠洲、古瀬戸、青磁、伊万里、唐津、越中瀬戸が採集されている。

16は甕の口縁部で古墳時代のものと考えられる。17・18・20・22・29は古代の土師器で、17・18・20・29は甕か鍋、22は楕の底部である。20は内外面にタタキ痕が明瞭に残る。29は内外面それぞれに縦位のハケ、ケズリ調整が施される。19・23は須恵器。21・25・27・28は珠洲で、27は甕の口縁部付近と考えられる。24は古瀬戸で鉄軸が施される。26は青磁の碗である。

従来の遺跡範囲外西側では古代の遺物が集中して採集でき、東側においても遺物の散布が見られたため、遺跡範囲を若干変更した。

(5) 本江中遺跡（新規：第4図-5、遺物：第5図-30・31）

今回新発見の遺跡である。本江集落南側の標高約2mの地点に位置する。遺跡の範囲として東西約80m、南北約150mを推定した。

調査では弥生・古墳時代の土器、古代の土師器・須恵器、中世土師器皿、伊万里、越中瀬戸が採集されている。

そのうち、図示した遺物は30・31の2点である。30は弥生・古墳時代の土器で、小型で有段口縁の壺か鉢の口縁部破片と考えられる。内外面ともにミガキ調整され、赤彩されている。31は古代の須恵器で、壺の肩部破片と考えられる。内面にはわずかに同心円タタキ痕が確認でき、外面には格子目タタキが施される。

(6) 本江西遺跡（新規：第4図-6、遺物：第5図-32・33）

今回新発見の遺跡である。本江中新集落の南、下村との境界付近の標高約1.6mの地点に位置する。遺跡の範囲は東西約60m、南北約150mである。

調査の結果、遺跡周辺では中世の遺物が散見できたが、遺跡範囲として設定した場所では古代の遺物が集中していた。

採集できた遺物は古代の土師器・須恵器、唐津である。

そのうちの2点を図示した。32・33ともに土師器壺の破片である。33は壺部破片で内面にロクロ口が喇叭に残る。

(7) 本江針山遺跡（新規：第4図-7、遺物：第5図-34）

今回新発見の遺跡である。本江針山集落南側に隣接した標高約0.9~1.4mの地点に位置する。遺跡として設定した範囲は東西約210m、南北約100mである。

採集した遺物は弥生・古墳時代の土器、古代の土師器、珠洲、越中瀬戸、その他である。

そのうち、第5図34の珠洲1点のみを図示した。

(8) 本江針山西遺跡（新規：第4図-8、遺物：第5図-35~39）

今回新発見の遺跡である。遺跡は富山商船高等専門学校の南東部に位置し、東部二号排水路を挟んで南側の下村山屋地内では、平成12年度に新たに発見された山屋遺跡が隣接している。標高は約0.8mで東西約270m、南北約210mを遺跡範囲として設定した。

採集した遺物は绳文土器、弥生・古墳時代の土器、古代の土師器・土鍤、中世土師器皿、青磁、伊万里、肩沖、越中瀬戸である。

37は绳文土器である。器面は暗茶褐色で胎土に細かな砂粒を含んでおり、外面には斜綱文が施される。小破片であるため器種や時期を確定することはできないが、晩期までは下らないものと考えている。採集されたのは1点のみではあるが、遺跡の存在が知られていなかった場所だけに注目できる。38・39は古代の土師器で壺の口縁部破片、35は土鍤である。36は青磁碗の底部で、高台外側の釉薬が厚く見込み部には草花文が描かれている。

(9) 遺跡範囲外採集の遺物 (遺物: 第5図-40~49)

第5図40~49は遺跡範囲外採集の遺物である。40は土師器甌の口縁部で古墳時代のものと考えられる。41は古代の甌口縁部、42は須恵器で帯または瓶類の底部附近と考えられる。43は中世上師器皿、47~49は珠洲、44~46は青磁である。散発的ではあるが、中世の遺物は本江中新集落～本江針山集落付近までの間にやまとまりがみられる。

2 遺物の散布状況

以下、今年度調査地区探集遺物を各時期ごとに大別し、その散布状況を記す。

散布状況図は、新湊市都市計画座標を基準に1辺200mの方眼を設けその傾向を示した。なお図中の数字は破片数のみを表したものであり、個体数は明らかではない。また探集遺物は細片となっているものが多く、弥生土器と古墳時代の土師器等とは識別が困難であったため、弥生・古墳時代の土器として一括して取り扱った。

(1) 縄文時代の遺物散布状況 (第6図)

縄文時代の遺物は本江針山西遺跡で縄文土器が1片のみ採集されているにすぎない。現在のところ付近では同時期の遺物の存在は知られておらず、範囲を広げると、新湊市では利波遺跡と片口の下久々江遺跡、下村加茂遺跡、富山市四方～八町にかけて広がる遺跡群が縄文時代の遺跡として知られている。

これらの遺跡は時期的には縄文時代後・晩期及び弥生時代前期のものであり、気候の寒冷化に伴う海水面の低下、平野部を流れる諸河川の堆積作用による放生津潟の縮小などによって生活範囲が沖積平野まで広がってゆく時期である。中でも放生津潟に接するという地形上の観点からみると、下久々江遺跡との関係に着目すべきであるが、残念なことに下久々江遺跡は現在では事实上調査不可能な状態であり、その内容は不明のままである。

市内において縄文土器が一定量見られる津幡江地内では、試掘調査により地表下約1mの地点から縄文土器が出土している。本江針山西遺跡は放生津潟付近の低湿地遺跡として、津幡江地内同様、地表より深い場所に遺跡が存在する可能性がある。

(2) 弥生・古墳時代の遺物散布状況 (第7図)

弥生・古墳時代の土器42片が採集されている。遺物は本江地区全体に分散して見られるが、利波遺跡の西側、本江遺跡の南東部、本江東遺跡の東部、本江針山集落付近である程度のまとまりが見られ、中でも利波遺跡付近に集中する傾向がある。利波遺跡は南の富山市側の微高地に中心部が存在する可能性もあるが、利波遺跡を拠点としつつ、その周辺部に小規模な遺跡が点在するような状況が伺える。

(3) 古代の遺物散布状況（第8図）

土師器・須恵器の計47片が採集されている。弥生・古墳時代に集中傾向を見せていた利波遺跡周辺では遺物の分布が散漫になり、本江地区の西部や海岸線付近に分布の中心を移している。本江東遺跡では古代集落の存在が知られており、その西側の住宅地内では狭い範囲に遺物が集中している場所があるなど、海岸線付近に一つのまとまりを見ることができる。他には、本江西遺跡や本江針山西遺跡でも遺物がややまとまって分布している。

当地での古代遺跡の展開を考える上で、西大寺領桙山荘の存在は無視できない。桙山荘は現在新湊市に隣接する下村の加茂東部（新村）付近一帯にその所在地が比定されているが、付近での調査は行われていない。位置的にはやや南に下るが、まとまった調査の行われている下村加茂遺跡でも古代の遺跡の広がりはほとんど確認されておらず、現段階では古代の桙山荘の規模や所在地等を示唆する資料はほとんど存在しない。しかし本江針山集落周辺で古代の遺物の散布が見られたことや、海岸線付近の本江東遺跡・富山市打出や四方周辺の古代遺跡の存在に着目すれば、桙山荘が下村加茂東部から新湊市針山へ本江付近まで広がっていたと想定することも可能ではないだろうか。そこでは物資の輸送や交通の手段としての水運の利便性に恵まれ、放生津潟、加治川、日本海沿岸の陸路および海上交通等によって伏木の国衙、あるいは中央へと物資を輸送していたことが推測できる。

桙山荘は平安時代以降の西大寺の衰退に伴い、鎌倉時代頃には有名無実化していたようである。その後、同地は加茂社領倉垣荘として引き継がれ、耕地経営が行われたと考えられる。現在の針山集落は近世に入って村立てされた新村であるが、中世を通じて「ハリヤマ」という地名のみが伝えられ、村立てに際してその故名が用いられたのかもしれない。

(4) 中世の遺物散布状況（第9図）

中世土師器皿、珠洲、古瀬戸、青磁の計37片が採集されている。

中世の遺物は利波遺跡周辺に再び集中傾向を示すほか、本江や針山集落周辺にも分散している。今回の調査では、中世およびそれ以前の遺物についても本江針山集落付近に分布の限界点が見られた。この分布の限界点は何を示しているのであろうか。この点について高瀬保氏は石造物の分布から中世期の放生津潟の広がりを想定している（高瀬1964）。石造物の所在地が必ずしも中世期の放生津潟の広がりや集落の存在を反映することは限らないが、分布調査の結果のみから考えると、針山集落以東では潟の範囲がやや縮小すると考えられるものの、高瀬氏の想定している中世期の放生津潟の範囲に類似した分布状況であるといえる。近世に至って放生津潟の大規模な干拓が行われる以前には、近接する場所で潟を利用しつつ生活を営んでいたのであろう。なお中世期には当地は加茂社領である倉垣荘に属していた。

前章で既に述べたとおり、中世には海岸線に沿って街道が通っていたことは文献等から確認できる。現在では宅地化が進み中世期の遺物の採集はできなかつたが、海岸沿いの宅地の下には遺跡が存在する可能性が高い。

(5) 近世以降の遺物散布状況（第10図）

越中瀬⁴⁾、越中丸山、伊万里、唐津、瀬戸、その他の計222片があり、遺物の点数は急増する。中世以前には遺物の分布の見られなかった場所にまで分布範囲は拡大していることから、近世以降の開発の進展を示しているものと考えられる。

3 小 結

今回の調査結果から、新たに4遺跡の存在を確認し、3遺跡において範囲の変更を行った。

調査対象地区は、その大部分を占める海岸線一帯が、宅地化あるいは護岸や埋め立てなどによってかなりの地形の改変を受けており、表面採集の可能な範囲が制限された状態であった。そのため遺物の散布状況もかなり偏ったものとなっているが、本江地区では新たな遺跡の発見もあり、成果が得られたと考えている。海岸部一帯では、遺跡としてのまとまりを見るには至らなかったが、その歴史的環境などから遺跡が存在する可能性が高いと考えられる。今後、機会を得て確認を行ってゆくことが課題となるであろう。

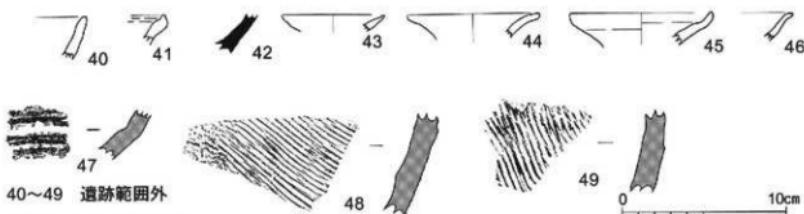
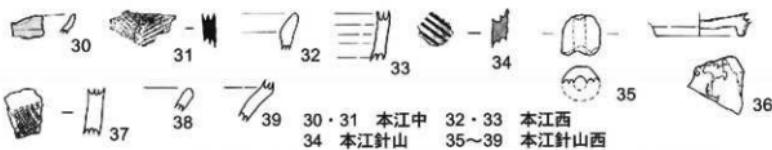
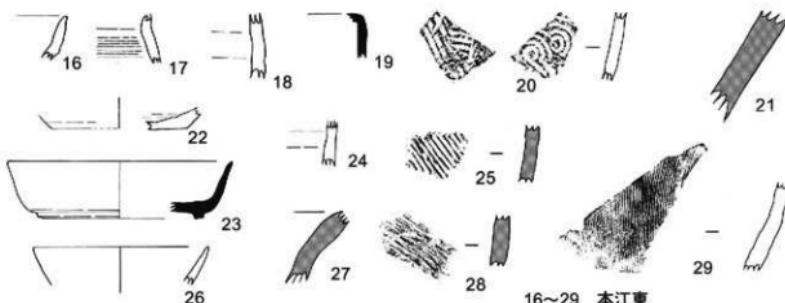
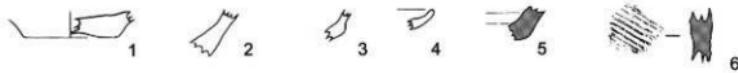
	本報告書	県遺跡 地図番号	本報告書での 変更等	「平成5年富山県埋蔵文化財包蔵地図」	「昭和47年富山県遺跡地図」	備考
1	堀切廻所跡	203034	周知	203034 堀切廻所跡	247 堀切廻所跡	
2	利波遺跡	203039	周知・範囲変更	203039 利波遺跡	694 利波遺跡	
3	本江遺跡	203053	周知・範囲変更			
4	本江東遺跡	203054	周知・範囲変更			
5	本江中遺跡	203058	新規			
6	本江西遺跡	203059	新規			
7	本江針山遺跡	203060	新規			
8	本江針山西遺跡	203061	新規			

付 図 調査遺跡一覧

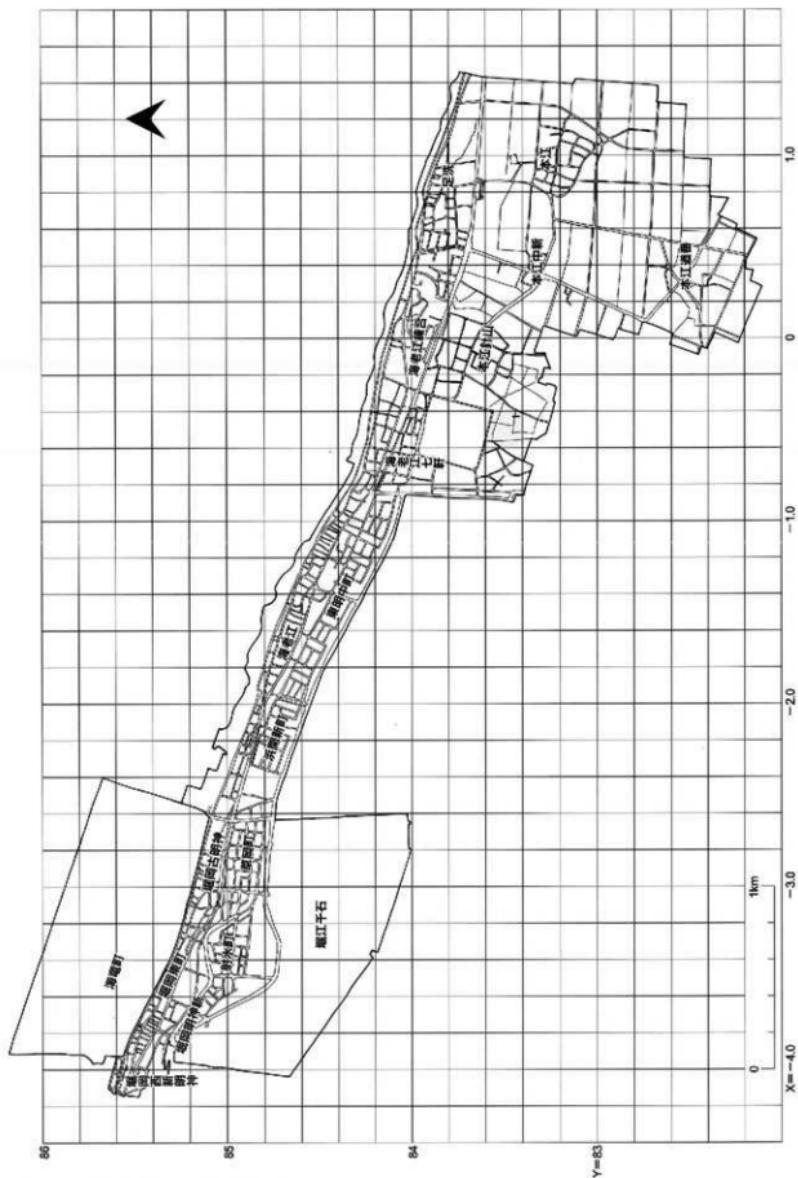
参考文献

- 文化財保護委員会 1965 「全国遺跡地図（富山県）」
富山県教育委員会 1972 「富山県遺跡地図」
富山県教育委員会 1993 「富山県埋蔵文化財包蔵地図」
下村教育委員会 1999 「下村加茂遺跡発掘調査報告書」
新湊市 1964 「新湊市史」
新湊の歴史編さん委員会 1997 「しんみなどの歴史」
新湊市教育委員会 1999 「新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ」
新湊市教育委員会 2000 「新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ」
新湊市教育委員会 2000 「本江東遺跡発掘調査概要」
青木一彦他 1996 「射水平野の遺跡－古代北陸道を探る－」『大境第18号』富山考古学会
岡崎卯一 1966 「利波跡・利波跡の調査」『放生津高周辺の地学的研究第3集』富山地学会編
久々忠義 1999 「下村加茂遺跡の紀元を探る－下村加茂遺跡発掘報告』下村生涯学習叢書2
棚元理一 1998 「射水平野の古代北陸道」『草鳥遺調査報告書』富山市日本海文化研究所紀要第11号
藤井昭一 1964 「地質からみた射水平野の形成と放生津湖の変遷」『放生津湖周辺の地学的研究』富山地学会編

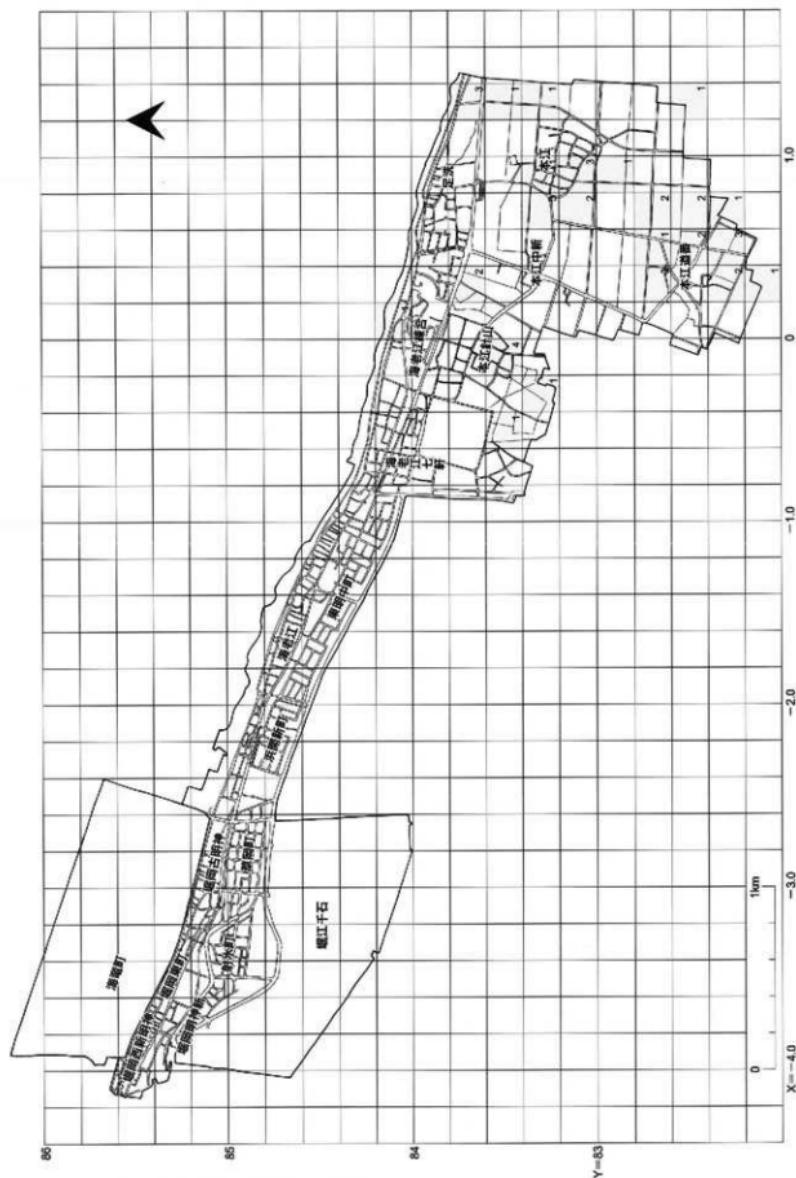
図 版



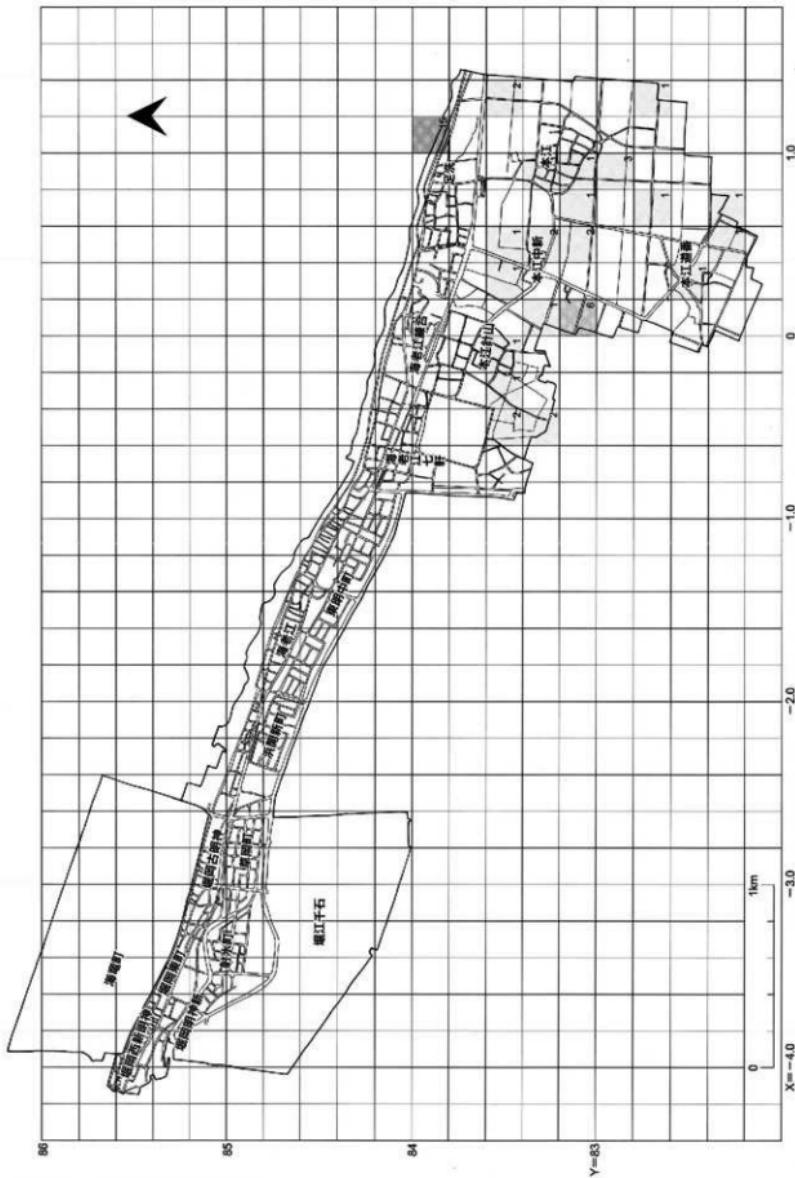
第5図 採集物実測図



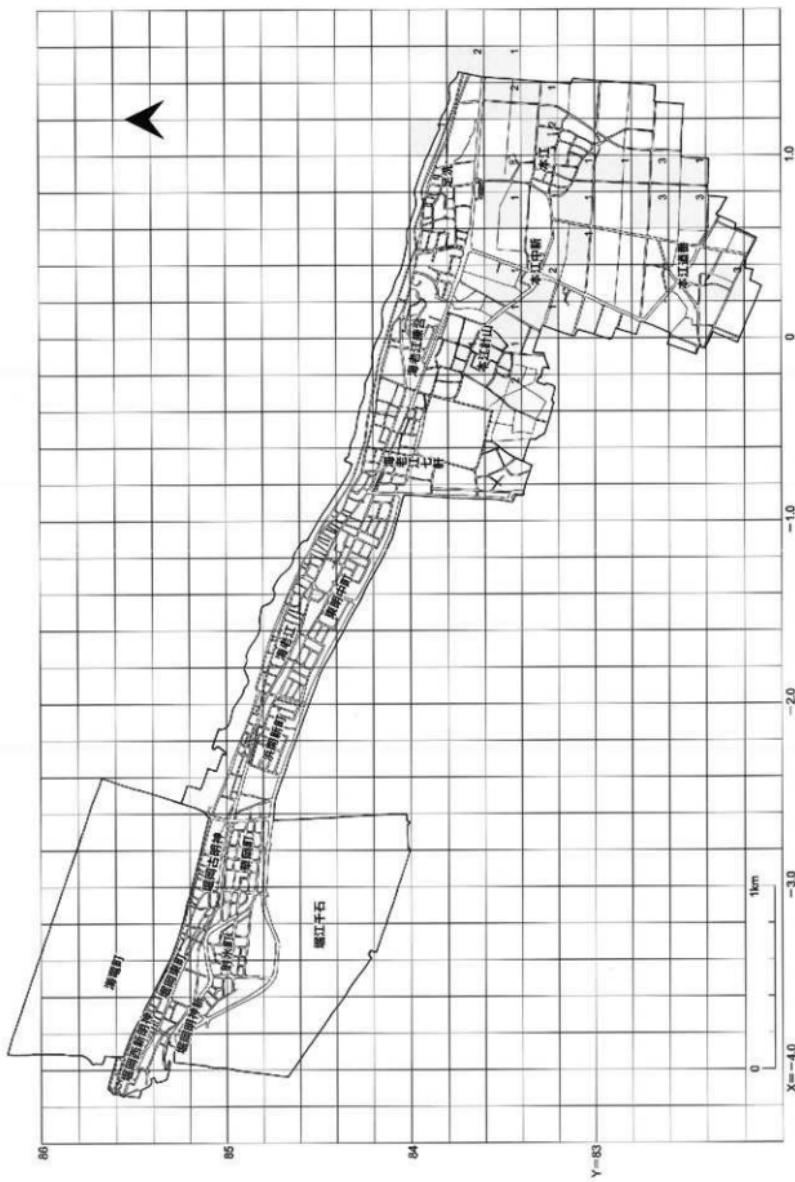
第6図 繩文時代の遺物散布状況



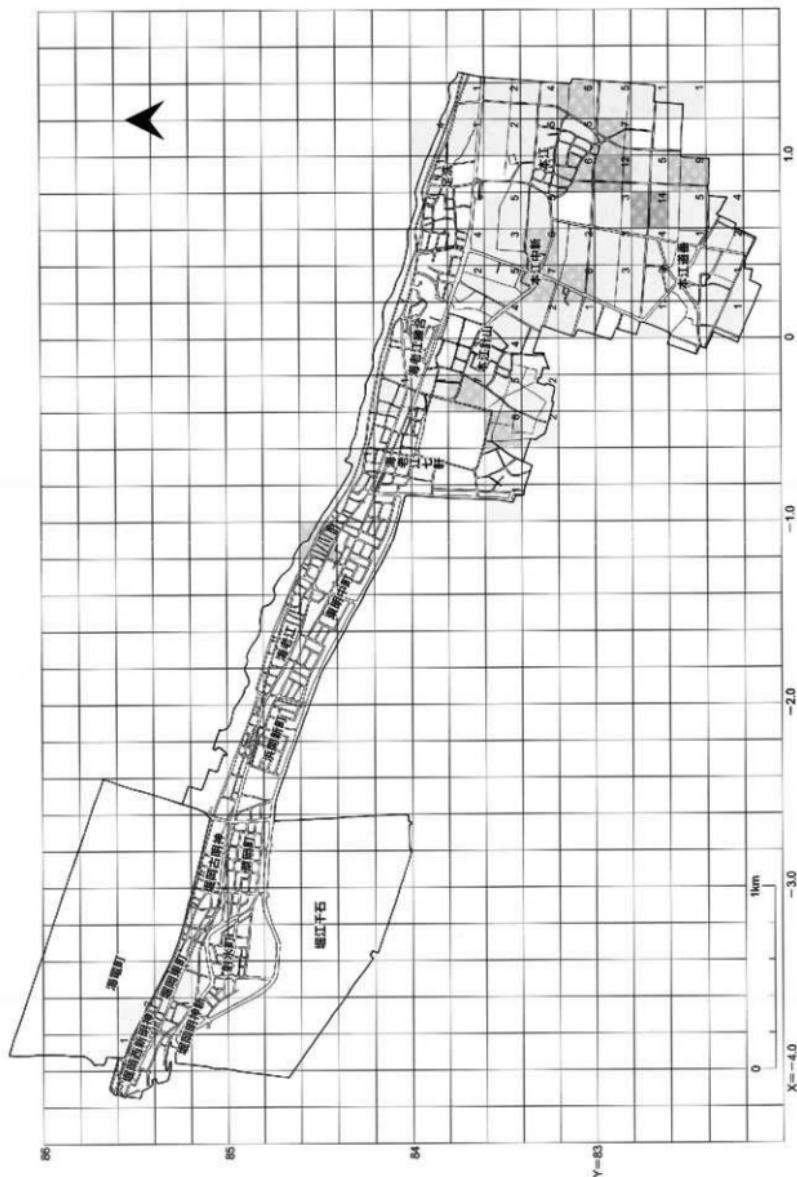
第7図 弥生・古墳時代の遺物散布状況



第8図 古代の遺物散布状況



第9図 中世の遺物散布状況



第10図 近世以降の遺物散布状況



航空写真（昭和22年米軍撮影）







堀切関所跡
(西から)



利波遺跡
(北から)



本江遺跡
(南から)



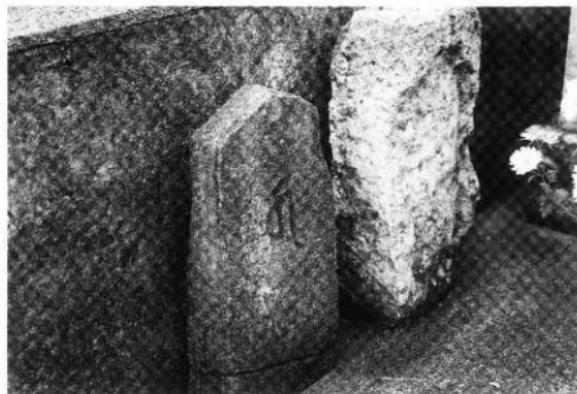
本江東遺跡
(南から)



本江中遺跡
(北から)



本江西遺跡
(南から)





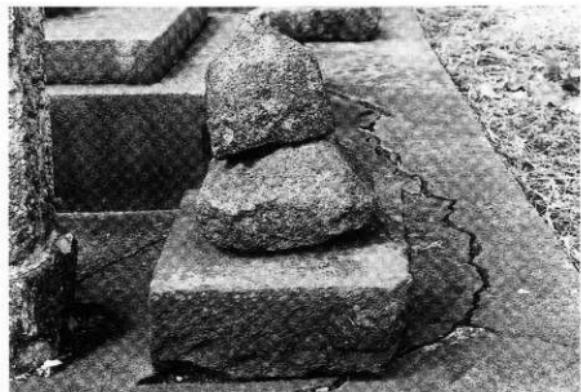
本江足洗地内
板碑



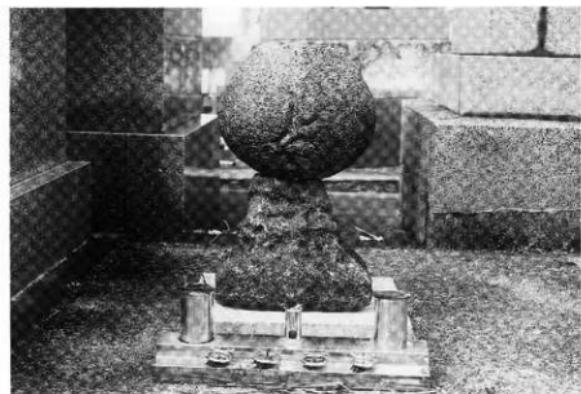
本江地内（光覺寺）
一石五輪塔



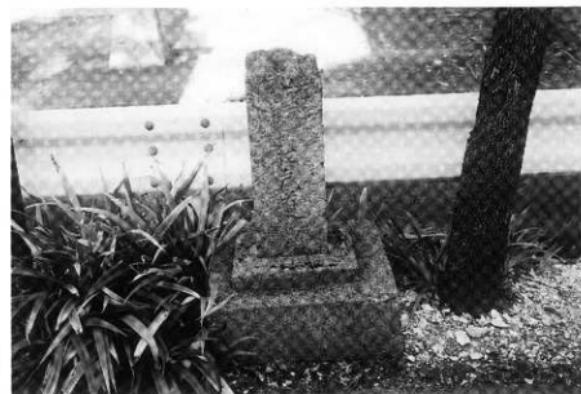
本江地内（光覺寺）
宝筐印塔



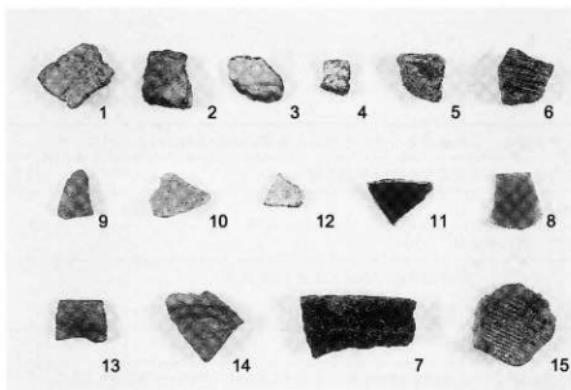
本江地内
板碑



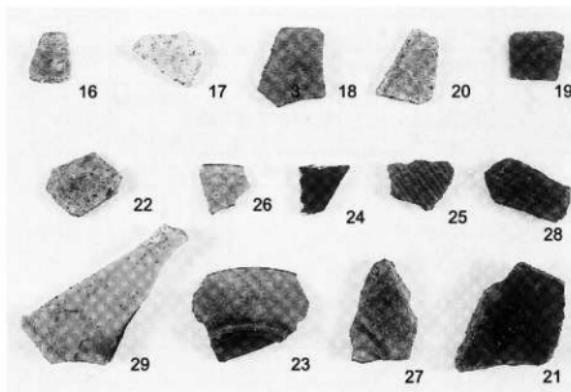
本江地内
五輪塔



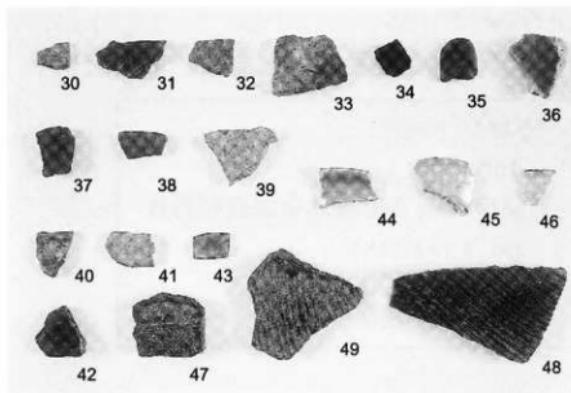
市指定文化財
道番の道標



利波遺跡
本江遺跡



本江東遺跡



本江中遺跡
本江西遺跡
本江針山遺跡
本江針山西遺跡
遺跡範囲外

報告書抄録

ふりがな	とやまけん しんみなとしまいぞうぶんかざいぶんぶちょうさほうこくⅣ							
書名	富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ							
編著者名	金三津英則							
編集機関	新湊市教育委員会							
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312							
発行機関	新湊市教育委員会							
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市内遺跡	富山県 新湊市内	市町村	遺跡番号	36°47'00"	137°05'00"	20000403 ～ 20010330	—	—
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
市内遺跡		縄文～近世				縄文土器 弥生土器 上部器 須恵器 珠淵 青磁 伊万里 唐津 越中瀬戸		

平成13年3月30日発行

富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ

編集 新湊市教育委員会

発行 新湊市教育委員会

富山県新湊市本町二丁目10番30号

印刷 リタニグチ印刷

